

東海散士『佳人之奇遇』

解説 小松 久男

明治時代の
日本人のエジプト観

数千ノ将士王宮ヲ囲ミ亜刺飛
侯^{バキス}ヲシテ王ニ請ハシメテ曰ク
第一国ヲ売ルノ内閣ヲ解散ス可
シ、第二国会ヲ設立シテ万機公
議ニ決ス可シ、第三兵制ヲ嚴ニ
シ以テ危急ニ備フ可シト。英人
之ヲ聞キ直ニ本邦ニ飛報シテ曰
ク、埃及ノ人民王ヲ要シテ公議
ノ政ヲ建テント欲ス、然レドモ
是レ本ヨリ人民ノ輿望ニ非ラズ、
亜刺飛ノ扇動スルニ由ルノミ、
……宜シク急ニ兵馬ヲ遣テ其
勢力ヲ挫折スベシト。時ニ埃及
全国ノ新誌日ニ歐人ノ專横暴戻
ヲ鳴ラシ国権回復ヲ唱ヒ民心ヲ
鼓舞誘掖セザルハナシ。歐人之
ヲ恐レ政府ニ迫リ新誌ノ発行ヲ
禁止セシム。嗚呼英仏ハ言論ノ
自由ヲ重ズルノ邦国ナリ而シテ
今此ノ如シ。

(東海散士『佳人之奇遇』)

①ウラービー

著者の本名は柴四朗(1852~1922)。彼は会津藩士の家に生まれ、戊辰戦争の時は鳥羽・伏見の戦いに出陣したのち、白虎隊の一員となったが、病弱のため戦には加わらず生き残った。賊軍とされた会津藩士は新政府のもとで冷遇されたが、彼は苦学の末にアメリカ留学の機会を得た。6年ほどの留学で世界情勢を広く学び、帰国すると鹿鳴館時代の欧化主義を批判し、日本が欧米列強に対抗しつつ自立した国家としてとるべき道を献策する意図で政治小説『佳人之奇遇』の執筆に着手した。小説は主人公の東海散士^{とうかいさんし}がそれぞれスペイン革命とアイルランド独立運動に従う2人の女性(佳人)とアメリカで偶然に出あうという設定に始まり、世界の各地で民族独立運動の闘士たちと語り、弱小国の運命を描くというかたちで展開していく。全8編・16巻からなり、1885~97年間に順次刊行された。

『歴史総合 近代から現代へ』(歴総707) p.56に引用されているのは、エジプトの軍人ウラービー(1841~1911)に関する部分である。史実としてのウラービーは、イギリス・フランスによる植民地化に反対して「エジプト人のためのエジプト」をス

ローガンに民族運動を指導した人物として知られている。当時のエジプトは外来のムハンマド=アリー朝の専制統治下にあった。その君主は宗主国のオスマン帝国^{ヘデイグ}の副王であったが失政を重ね、対外債務がふくらんで財政は破綻し、歳入はイギリス人、歳出はフランス人の大臣が管理する「ヨーロッパ内閣」が成立した。農民は重税に苦しむ一方、通商や外国人が関わる裁判では同時代の日本と同じく不平等条約に縛られていたのである。

このようなエジプトを救うために立ち上がったのが、農民出身のウラービー大佐を指導者とする民族主義者たちであり、彼らが結成した祖国党にはパン=イスラーム主義の思想家アフガーニーの影響もあった。彼らは1881年副王にせまって憲法の制定とエジプト人の内閣を実現したが、イギリス・フランスはこのエジプト最初の民族運動に干渉し、翌年イギリスはスエズ運河の確保と債権保有者の保護をめざして武力行使に踏みきった。陸軍大臣ウラービーらの運動は国民的な支持を得ていたが、イギリス軍に敗北した結果、エジプトはイギリスの軍事占領下におかれることになる。そして敗軍の将となったウラービーは、イギリス統

治下のセイロン島に流刑となった。エジプトが完全な独立を達成するのは第二次世界大戦後のことである。

それでは、ウラービーはなぜ『佳人之奇遇』に登場したのだろうか。柴四朗は1886年、第1次伊藤博文内閣の農商務大臣^{たにたてき}谷干城の秘書官として1年3カ月にわたる欧米視察をおこなった。彼はかつて西南戦争に官軍の一員として出征した際、熊本鎮台司令官であった谷干城の知遇を得ていたが、今回はその高い英語力と海外事情の知識を買われての抜擢であった。この旅行の途次、柴四朗はセイロン島でウラービーその人に面会して強い感銘を受け、さらにエジプト現地を訪問すると、イギリス統治下の惨状に衝撃を受け、しいたげられたエジプト人に深い共感をいだくことになった。帰国後には欧文の資料を駆使して『埃及近世史』(1889年)を書いているが、このなかでもウラービーを、支配者層の専横を怒り、死をかえりみずに抵抗した大佐で、熱心に立憲政体を主張し、国家のためには斃^{たお}れてのち已^やむの精神を有する義胆の人、と激賞している。ウラービーこそ『佳人之奇遇』に取り上げるべき英傑であったことがわかる。

資料中にはウラービーが副王に売国的な内閣の解散や国会の開設を提案すると、これに危険を察知したイギリスが軍事的な制圧を企て、民族主義を掲げる新聞の発行を禁止したというくだりが描かれている。これは著者の知見にもとづいた迫真の表現といえる。文中の「万機公議に決すべし」は1868(明治元)年の五箇条の誓文にみえる「万機公論に決すべし」を想起させる。著者はエジプトの民族運動への共感を示す一方で、イギリス・フランスの「言論の自由」にみせる言行不一致を批判している。ここにみられる「公議」や「言論の自由」は、自由民権運動期の日本においても重要な論点であり、これは『佳人之奇遇』が多くの読者を得た理由の1つではないだろうか。

『佳人之奇遇』は谷干城と柴四朗がセイロン島で

ウラービーと交わした談論を彷彿とさせる場面も描いている。最初は敗軍の將に兵を語る資格はないと固辞していた^{アラビヤ}亜刺飛侯(ウラービー)だが、敗將の自分を遠路たずねてくれた2人の懇請には逆らえず、いくつかの忠告を与える。曰く、ヨーロッパ人は「四海は兄弟なり文明の世何ぞ邦と人種との異同を問わん」、「各邦平和親睦を締盟せば万世亡滅の憂いなし、もし一国不良の謀あらば万国公法に抛りて天下共に之を伐たんのみ」と「公平無私」の姿勢を示すが、これはみせかけにすぎない。とくに警戒すべきは外債の罨である。「古来弱国外債のために国を誤まらざるもの」はほとんどなく、返済がとどこおれば国土を奪われることになる、と。これはエジプトの経験をふまえた訓戒にほかならない。そして亜刺飛侯は日本が富国強兵に励んでいることを評価したうえで、その将来についてこう語る。「信義を重んじ正理に則り隣近の弱国を撫育保護せば覇を東洋に称する日を期して待つべきのみ」と(原文の表記を一部改めた)。

帰国後、柴四朗は反藩閥政府のジャーナリストとして活動し、1892年に衆議院議員に当選してからは国権を拡大し、対外強硬をとこなえる政治家へと変貌していくことになる。日清戦争後、駐朝鮮公使の^{みうらごろう}三浦梧楼が親露・排日政策をとった^{ひんひ}閔妃の殺害事件をおこしたが、当時柴四朗は三浦梧楼の顧問をつとめており、事件に連座して一時拘禁されている。『佳人之奇遇』も東海散士が獄中で「鉄窓の一夢」から覚めるところで終わっている。やがて植民地をもつことになる日本と、イギリスの植民地とされたエジプトの姿は対照的である。

参考文献

- 杉田英明「日本人の中東発見——逆遠近法のなかの比較文化史」(東京大学出版会、1995年)
東海散士『佳人之奇遇』(大沼敏男・中丸宣明校注「新日本古典文学大系 明治編17 政治小説集2」(岩波書店、2006年)所収)
(こまつ・ひさお/東京大学名誉教授)